

はじめに

ある料理人の運命

これは、ある一人の女性の生涯しやうがいの物語だ。その女性は、料理がとて
もうまい人だった。子どもの面倒見めんどうみもよく、雇い主やとぬしからは信頼しんらいされて
いた。だから、料理に存分に腕うでをふるい、雇い主にも信頼されてそのまま生活していけ
たとすれば、貧しいながらも、それなりに幸せな人生だっただろう。

だが、その女性には過酷かこくな運命が待っていた。三七歳さいになったあるとき、突然、自分
自身には身に覚えもないことで、公衆衛生学にとっての注目の的になり、その後の人生
が大きく変わっていく。突然、自由を奪うばわれ、病院に収容されるのだ。

なぜ、そんなことになったのだろう。それは、その女性が、腸チフスというとても恐おそ



ろしい病氣に罹^かつており、しかも、彼女^{かのじよ}が作る料理によつて、それを他人に感染^{かんせん}させていると、まわりの関係者たちは思ったからだ。だが、彼女は、そんな病氣には罹^かつたことがない、と自分では思つていた。それはまさに青天の霹靂^{へきれき}だつた。

料理^{かい}を介^{かい}した死？

料理を作るのは楽しいものだ。タマネギを炒^{いた}めてしばらくすると、シヨナツとした感じになり、それをへらでいじくり回しているのはなんだか楽しいし、バターを溶^とかしたときのいい匂^{にお}いはなんともいえない。たとえ苦勞して作つたとしても、おいしそうに食べてくれるのを見ると、疲勞感^{ひろうかん}は吹き飛^とび、満足感を覚える。料理は、人に命^{あたま}を与える。空腹でふらつき、いらだつたとき、おいしいものをおなかいっぱいになるまで食べる。すると、内側からじわつと力が湧^わいてくる。そして心までなんだか和^{なご}んでくる。こんな風にして、食べ物に命をもらいながら、私たちは生きている。だからこそ、まさに、自分が作つた当の料理が、人を重い病^{おとし}に陥^{おとし}れ、ときには死さえもたらす、と突然人にいわ



れたときの、彼女の怒りと驚きは、耐えがたいものだっただろう。

主人公の名前

三七歳を境にして、彼女の生涯は大きく変わった。それから三〇年以上も彼女は生きるのだが、ほんの数年を除けば、残りの人生の大部分を、一種の隔離状態のなかで生きていかねばならなかった。皮肉なことに、まさにそれによって、彼女は歴史に名前を残すことになった。

その女性の名は、メアリー・マローン (Mary Mallon) という。私は、この小さな本で、この女性の人生を辿ってみたい。そして、そうしながら、彼女の身に降りかかったいろいろな事件がもつ意味を考えてみよう。読むにつれて、きっと君たちもわかってくれるはずだ。彼女の物語は、単に彼女一人だけの逸話には終わらないということが。彼女の人生は、彼女一人の人生を超えて、他のいろんな人たちに重大な問いかけをしているということだ。

個人と全体の利害対立

社会に住む不特定多数の人たちの命を救うためなら、一人の人間、または少数の人間たちの自由がある程度制限されても、仕方のないことなのか。その場合、一言で自由の制限とはいっても、どの程度までの制限が許されるのか。せつかくもらった命なのだから、一人ひとりが自由に生きていくというのは、もちろんとても大切なことだ。だから、人の自由を意味もなく奪うなどということは絶対に許されない。だが、それは同時に、ある人の存在や行いが、他の人たちの自由を奪うような可能性があるとき、その人の自由は無制限には許されないということでもある。重い病気に罹らせ、ときには命さえ奪うということは、まさに相手の自由を奪うことでもある。いったい、この両者のつながりをどう考えたらいいのだろうか。

要するに、少し難しくいいかえるなら、個人の自由と全体の福祉^{ふくし}とが、互^{たが}いに相克^{そうこく}関係にあるとき、それをどのように調停したらいいのか、ということだ。

歴史のなかの「善と悪」？

それから、この本では、次の問いかけもしてみたい。私たちは、歴史のなかで過去に生きた人が、なにかすばらしいことをしたと知ると、その人の業績を心から誉めたたえる。それには、なんの問題もない。

だが、それと同時に、なにかよくないことをしたといわれる人に対しては、その逆に、非難し、あざけり、口汚くくちぎたなののしりたいという気持ちに駆られる。だが、私たちは、怒りや憤りをぶつけようとする当のその人が本当はなにをやったのかを、いつもよく知っているとしてもいうのだろうか。大して知らないのに、そういうことになっているから、とりあえずは非難しておこうとか、「ああ、ああいうタイプの人だね」と自分の経験から簡単に類推して、過去のその人も同時に軽蔑するけいべつというようなことを、していないだろうか。もつというなら、過去に生きたいろいろな人たちの人生を簡単に色づけして、「あれは善い、これは悪い」と、性急で単純な判断を下してはいないだろうか。そしてその判

断が正しいか否かは別にして、そもそもそういったまなざしを過去に振りむけるということは、現在起きつつあることに対する態度にも、なんらかの影響を与えるのではないだろうか。

歴史は、善玉と悪玉によって作られるもののだろうか。むしろ問題にすべきなのは、そんな具合に、簡単に善悪の単純な二分法で人間社会を切り分けようとする、物の見方の方にあるのではなからうか。

この問いかけが、たぶん一番重要な問いかけであり続けるだろう。でも、もっと詳しくこの本の主人公の人生を見ていけば、それ以外にも、いくつかの重要な問いかけが潜んでいるということが、君たちにもわかってくるはずだ。

悲しみという感動

一般に、本を書くためには、まずなによりも、書き手が一種の感動を体験していなければならぬ。しかも、この場合の「感動」というのは、なにも、美しいもの、すばら

しいもの、立派なものなどを見たときの感情だけには限らない。実は、人は、悲しいもの、苦しいもの、醜みにくいものを見てさえ、心を揺ゆさぶられる。それもまた、一種の感動だ。そして、私がこの本を書きたいと思ったときに、私の心を突き動うごかしていたものは、ある種の悲しみだったような気がする。誰だれを責めるというのでもない、長く続くシーンとした悲しみのような感情。私を動かしていたものが、過去に生きた一人の女性への興味本位のまなざしとか、外野席からの高見の見物とか、そんなものではなかったことだけは確かだ。君たちも、彼女の人生を知れば知るほど、そんな気軽な興味だけでは覆おほいつくせないものがあるということを、感じ取ってくれるに違いない。

基礎資料きそ

なお、本書のために使った資料はもちろんたくさんあるが、そのなかではなんといつでも、現代アメリカの医学史家、ジュディス・リーヴィットの仕事に本当に多くを負っている。彼女の本『チフスのメアリー』（一九九六）は、メアリーのことを知ろうと思

う人には、これからずっと基礎文献きそぶんけんであり続けるだろう。私がいま書いているこの小さな本も、彼女の仕事なしでは考えられなかった。ここに、そのことをしっかりと書きとめておく。

では、メアリーの物語を始めることにしよう。やや難しいところもあるかもしれないが、少しでも我慢がまんしてほしい。あるいは、ちよつとなら読み飛ばしてもかまわない。メアリーの人生の大まかな流れをつかみ、その意味するところを自分なりに考えてみてくれれば、それで十分だ、と私は思う。その経験を通して、なによりも、一人の人生の重みのようなものが、実感として胸を打つはずだ。本当に、それだけで十分なのだ。



事件以前のメアリー



若い頃ころのメアリー・マローンの人生は、実はあまり知られていない。彼女は、いまだという北アイルランドのほぼ中央部に位置する町、クックスタウンで、一八六九年九月二三日に生まれた。父親はジョン、母親はキャサリン・イーゴ。メアリーはその土地で、強い土地のなまりで話す元気な少女に育っていった。だが、おそらくは経済的な理由で、一八八三年にはアメリカに移住してくる。彼女はまだ二三、四歳さいの少女だった。

アメリカに移住してからしばらくは、どうしていたのか。それも、実は詳しいことはほとんどわかっていない。一家の叔母おばがニューヨーク近辺にいたので、最初のうちは、一家は叔母たちと一緒いっしょに住んでいたらしい。だが、アメリカにはその叔母以外に血のつ

なりのある人はいなかった。だから叔母や両親が死んでしまつて以後は、頼りになる親戚は誰もいなくなつた。

彼女が移住してきてから約一四年もの間、つまりちようど彼女の青春時代にあたる時期に、メアリーがどんな人生を送つていたのかは、ほとんどわかつていない。そもそも彼女は、自分の昔のことを人に積極的にしゃべるタイプの人ではなかつた。彼女の青春時代は、ほとんどが霧のなかなのだ。

だが、とにかく彼女とその一家は、一九世紀終盤から二〇世紀初頭にかけてアメリカに移住してきたアイルランド系移民家族の一つだつた。メアリーの一家が、その多くの人たちが置かれていた状況と、大きく違うものだつたとは考えにくい。だいたい想像がつくように、彼ら移民たちの生活は、かなり過酷なものだつた。特に女性たちは、どうか、土地の良家の召使いとして働くことが多かつた。一般に、召使たちの仕事はさうとうハードなものだつた。朝は六時頃に起き、夜は一時頃まで働くことも希ではなく、食べ物は主人一家の余り物。住み込みの小さな部屋で、粗末な風呂に汚いベッドしかあ

てがわれないということもしばしば。そしてなにより、そんな生活だったので、よい男性と巡り合う機会もあまりなく、生涯独身を通す女性も少なくなかった。

メアリーも、きつと最初から、そのような仕事に就いていたはずだ。さつき触れたとおり、二〇代の彼女の生活はほとんどわかっていないのだが、彼女があるときから職業安定所で仕事を世話してもらうようになって以来、職業安定所に記録が残っているおかげで、それまでよりは、仕事の状況はわかるようになっていく。いまでも、一八九七年九月以降、つまり彼女が二八歳の頃以降の記録が残っている。

そして、メアリーもまた、世間の注目を浴びたとき、ある男性とつき合っていたが、結婚はしていなかった。彼女も独身女性だったのである。これは彼女には不利に働くことになるが、それはまた、後で触れ直そう。

チフス患者の発生

さて、このほとんど隙間だらけの「伝記」が突然詳しいものになるのは、一九〇六年